



N.S.ニュース速報A

NSDAP/AO : PO Box 6414

Lincoln NE 68506 USA

www.nsdapao.org

#1158

25.05.2025 (136)

戦争中のヒトラー 何が起こったのか？

A.V.シャーフェンベルク 著

パート5

第4章 戦争への序曲

「あなたはどんな平和にも抵抗する。戦争と平和が永遠に繰り返されることを望んでいる」

フリードリヒ・ニーチェ

序章 ツァラトゥストラはかく語りき

1933年1月30日に第三帝国が誕生したとき、ドイツ内外の反対派は、第三帝国はすぐに崩壊すると確信していた。彼らの誤解は、翌年7月の分裂的なローム一揆によってさらに強まった。つまり、再軍備が完了し、他国の大勢の異邦人が大砲の餌として命を賭けることが十分にできるように

なったときである。

ドイツは第一次世界大戦後、ウッドロー・ウィルソン米大統領の要請を受け、自発的に武器を放棄した。ウィルソン大統領は、連合国もすぐに軍縮計画を進めると約束した。その代わり、イギリスとフランスは軍備を維持しただけでなく、総統が首相に就任する何年も前から軍備の開発を続けていた。「総統は1933年10月16日の国際ラジオ放送で、「ドイツ国民とドイツ政府は、絶対に武器を持たないことを要求している。もし世界が、最後の機関銃に至るまですべての兵器を廃絶すると決定したなら、われわれはそのような条約に参加する用意がある。もし世界が特定の種類の兵器を廃絶すると決めたのなら、私たちは最初からそのような兵器を使用しない用意がある。しかし、もし世界が、特定の国だけが武装してよく、他の国は武装してはいけないと決めたのなら、私たちは、根本的に権利の少ない民族として排除されることを許す用意はありません」。

1930年代を通じて、彼はヨーロッパの相互軍縮のための提案を次から次へと行ったが、連合国側の新聞では「戦争屋」として中傷された。早くも1934年には、ヨアヒム・フォン・リッベントロップを軍縮特別委員に指名し、彼の最終的な意図の真剣さを示した。11年後、ヒトラーは、自分が避けようとしていた国際紛争の最後の日に、遺言の中で次のように述懐した。「私は、軍備の縮小と撤廃のために、永遠に説明できないほど多くの申し出をした。さらに、私は、第一次世界大戦の後に、イギリスやアメリカに対して第二次世界大戦が起こることを望んだことはない」

正当に選出された政権に対する国際的な煽動に気づいていたヒトラーは、近隣諸国と平和的な関係を築くために迅速に動いた。ファシスト・イタリアはすでにイデオロギー的な理由から新ドイツに好意的だった。しかし、フランスとイギリスは旧敵国であった。後者を保証するために、ヒトラーはフォン・リッベントロップに1935年6月18日にロンドンで英独海軍協定の交渉をさせた。この協定は、ドイツ海軍の軍艦数をイギリス海軍の水上戦力の35%にまで恒久的に削減するもので、イギリスのシーパワーに決して挑戦しないという第三帝国の意思を証明するものであった。しかし、この寛大な措置は受け入れられなかった。2年以上にわたるイギリスとの相互軍縮交渉の末、イギリスは、自分たち自身が調印したヴェルサイユ条約を遵守して軍備を縮小するのではなく、むしろ軍備の増強と拡張を続けるだろうと、はっきりと告げたのである。

ユダヤ人の絶え間ない戦争への煽動がイギリスでも他の国でも過熱する

中、ヒトラーは、ドイツが自分の周囲に構築されつつあるユダヤ人国家連合に対抗するチャンスを得るためには、ドイツ国防軍を再武装させなければならないことを知っていた。フランスに対しては、ドイツの伝統的な敵を味方につけるための大きな努力として、ヒトラーは、同胞が多数居住する係争地（アルザス・ロレーヌなど）に対するすべての領有権を放棄し、和解に向けた数々の外交的動きを見せた。例えば、レオン・デグレルによれば、「1935年、彼はベルリンで、同じく盲目のスカピーニ代理を団長とするフランス盲人戦没者代表団を特別な栄誉をもって迎えた」。また、「彼は、かつてのフランスの敵対者と友好を深める目的で、ドイツの退役軍人のドゥアモンへの巡礼を手配した」。

ヒトラーが政権を握る5年前の1928年から、ドイツの造船所はフランス海軍最大の武装艦であるダンケルク級に挑戦する戦艦を建造していたが、ヒトラーは平和のジェスチャーとしてこの戦艦の解体を命じた。パリの政治家たちはこの動きに呼応し、特に帝国に対抗するために共産主義ロシアと軍事同盟を結んだ。彼らの行動はヒトラーの外交とはまったく関係なく、ドイツをつぶすことだけを目的としていた。多くのフランス人は、自国政府の非道な行為に愕然とした。「1936年2月27日に仏ソ協定が批准された後、政治家のブノワ・メシャンは、「これからは危険な下り坂だ」と叫んだ。

イギリスでさえ、フランスは行き過ぎだと考えていた。ジョン・サイモン外務卿は駐仏大使に、「ロカルノ協定第2項と相容れない条件の下で、フランスが最終的に対独戦争に参加することになりかねない条約を締結するのを、イギリスは憂慮していることを、はっきりとした言葉で伝えるように」と伝えた。シモンが言及した第2項とは、ロカルノ協定の加盟国（フランスもその一員であった）が、他国を包囲する目的でいかなる国家とも同盟を結ばないことを誓約するというものであった。フランス国民は、自国の重要な利益に反してスターリンと同盟を結ぶことによって、得るものは何もなく、失うものはすべてあった（最終的にはそうなった）。このような悪魔との自滅的な協定は、ユダヤ人のためにしかならなかった。ユダヤ人は、国際法や、ユダヤ人のために世界を安全にするために異邦人が受ける犠牲とは関係なく、ドイツに対する「聖戦」をすべての連合国や中立国で公然と煽っていたのである。

このようなヤクザ戦術にも怯まないことを示すため、ヒトラーは3月7日、ラインラント再占領のために軍隊を派遣した。ラインラントという名

前そのものが、フランス領ではなくドイツ領であることを示すものだった。ヴェルサイユ条約を締結した戦争利権屋が約束した戦利品の一部として、欲望と永遠の復讐に駆られたパリの政治家たちは、敗戦で打ちひしがれた戦後ドイツからラインラントを引き剥がしたのだ。ヒトラーのラインラント「侵攻」に憤怒の声を上げた同じニュースメディアは、フランスによる「何千、何万の家族の故郷からの追放」については一言も報道しなかった（Brinkley, 9）。無防備なラインラント人をさらに辱めるために、スーダンの黒人植民地兵士が占領軍として使われた。

この卑劣な手段は世界中の人々を憤慨させ、フランスが完全に心ない憎悪に駆られていることを露呈した。有名な劇作家ジョージ・バーナード・ショーは、イギリス放送協会の声明の中で、武装した黒人たちによるラインラントのフランス軍占領を「西洋文明のゲームに参加していない」と非難した。ヒトラーによるルール地方の「再軍事化」は、この恥ずべき状況を覆し、フランスの政治家たちに明確なメッセージを送った：もし彼らが対立を引き起こせば、その結果を最初に味わうのは彼らだ。フランスの政治家たちは引き下がったが、世界は戦争への「危険な下り坂」に入ったのである。

総統がこの時期にドイツの再軍備を決断したのは、フランスの絶え間ない脅威と、国際問題の平和的解決策を求めようとしない不退転の決意があったからにはほかならないことは、いくら強調してもしすぎることはない。総統が、血と文化で結ばれた同族の絆を理由に、すべてのアーリア民族との協調を目指したのに対し、連合国の政治家たちは、すでにドイツ国民に宣戦布告していたユダヤ人支配者の命令で、国家社会主義の痕跡をすべて破壊することだけを考えていた。ヒトラーがフランスへの善意の証として解体を命じた戦艦は、今度は再建を命じられた。数年後、連合国はヒトラーのオリーブの枝を拒否したツケを払うことになる。巨大な戦艦シャルンホルストが、連合国にとって海の惨劇と屈辱となったのだ。

国際ユダヤの傀儡であるフランスの政治家たちが火遊びをしている間に、スペインのマルクス主義者連合はテロと汚職によって同国の国政選挙を強奪した。スペイン人の大多数はそうでないと投票したが、共産主義者とアナキストは、自分たちの新しい同盟を「人民」戦線と呼ぶ厚かましさを持っていた。マドリードの政府はこのボリシェヴィキの陰謀団に乗っ取られようとしていた。1936年の夏までに、スペインは内戦状態に陥った。愛国的抵抗は、スペイン版ファシズムであるファランギスト運動の創始

者、ホセ・アントニオ・デ・リベラに率いられていた。共産主義者のカンガルー法廷による彼の処刑は、国民の抵抗に火をつけた。

7月26日、用心深いソビエトはスペイン国内の苦境を利用し、西ヨーロッパに長年の夢であった足場を築く好機と見なした。スターリンは「軍事顧問」と物資をマルクス主義共和党に派遣した。間もなく、資金援助だけでなく、赤軍の最新の戦闘機や爆撃機を含む武器がソ連からスペインに流入した。この兵士と武器の流入に対抗するため、国民党は軍隊をモロッコからイベリア半島の戦場に一気に移す必要があったが、その手段がなかった。

自暴自棄になったフランシスコ・フランコは、自国の愛国的利益を代表して、ムッソリーニとヒトラーに助けを求めた。「いわゆる “人民戦線” によるこのような血なまぐさい犯罪の永続を前にして、無関心でいられるだろうか？ アントニオ・プリモ・デ・リベラにその創造者であり、禁欲者であり、殉教者であることを見出した救済運動への援助を拒むことができるだろうか？ こうして1936年7月27日、最初の戦闘機部隊が出発し、その日のうちに最初の死者を出した」。

総統は輸送機の航空艦隊を北アフリカに派遣するよう命じ、そこから国民党軍をスペインに運び、赤によるイベリア占領を阻止した。こうしてアドルフ・ヒトラーは、史上初の軍事空輸を構想し、実行に移した。それはスペインを救っただけでなく、最終的には全ヨーロッパがソビエト連邦の延長に成り下がるのを防いだ。後に総統が言ったように、「フランコはJu-52の記念碑を建てべきだ」。ユンカースJu-52は、乗組員から親しみを込めて「タンテJu」（Juおばさん）と呼ばれ、モロッコから国民党軍を空輸した航空機である。

その後3年間、スペイン内戦は、スターリンが共和党への支援をエスカレートさせたため、世界的な大火災に発展する恐れがあった。彼らは、しばしば自国の密かな祝福と援助を受けて、海外の共産主義者志願兵と合流した。フランスのユダヤ人首相レオン・ブルムの薄っぺらな庇護の下、彼らはスペイン国境を素通りした。エイブラハム・リンカーン旅団」（ユダヤ共産主義を擬人化したもの）と呼ばれるメンバーが、ルーズベルトの不介入という「公式」な公的政策にもかかわらず、スペイン内戦への自由な参加を許されていた。

しかし、国民党にも、アイルランドの青シャツファシストやイタリアの黒シャツから、ポーランドのパイロットやロシアからの駐在員まで、志願

兵が集まった。その中には、国民党の航空優勢を勝ち取ることで戦争の結果に決定的な役割を果たしたドイツのコンドル軍団の飛行士もいた。彼らの壮大なサガは、20世紀イギリス詩の大御所の一人であり、フランコのイギリス人志願兵の一人でもあったロイ・キャンベルの『*Flowering Rifle*』である。

1937年4月27日、無防備だったバスクの都市ゲルニカへの空襲に対して、世界中の新聞が怒りに包まれた。6,000人の女性と子供の死体というぞっとするような写真が、この恐ろしい悲劇を引き起こした「ナチスの殺人者」を非難する見出しとともに掲載された。フランス、イギリス、ロシア、アメリカのジャーナリストたちが、ドイツ人に対する世論を煽るためにあらゆる努力を払っていた一方で、コンドル軍団のパイロットたちはゲルニカを爆撃したことがなかったため、困惑していた。なぜなら、コンドル軍団のパイロットはゲルニカを爆撃したことがなかったからである。ゲルニカの民間人の死は現実のものであったが、実際には共産主義者の暗殺部隊によって虐殺されたものであり、彼らは自らの残虐行為を反ファシストのプロパガンダに変えていた。もちろん、彼らを幫助したのは、主に同情的な世界の報道機関であり、その読者はドイツ軍からも国際赤十字からも反対の証拠を知る機会を与えられなかった。共産主義者と報道機関が共謀して、国家社会主義者に不利な真実を捻じ曲げることは、アドルフ・ヒトラーが1920年にイデオロギーを確立したときから、よくあることだった。しかし、ゲルニカによって、欺瞞の範囲は前例のない規模に達し、それは第二次世界大戦中、現在に至るまで絶えず繰り返され、拡大されることになる。スペイン内戦の偉大な真実は、ヨーロッパ全土から集まった愛国主義者たちによって、かつての卑小で排外主義的な分裂を超越した新たな協力精神によって勝利したということである。

その真実は、1939年4月、フランコ將軍の勝利軍によってマドリードの通りを巨大なデモが繰り広げられたときにドラマチックに表現された。スペインのファランギストとイタリアのファシストは、ドイツのコンドル軍団や他の多くのヨーロッパの国籍を代表する志願兵とともにパレードした。彼らは、アーリア人の戦士として団結することによって、民族の最悪の敵を打ち負かすことができることを示したのである。

スペインでのファシズムと国家社会主義の鎮圧に失敗し、失望したユダヤ人とその手下たちは、彼らの「聖戦」を再燃させる他の機会を探し回った。彼らは中央ヨーロッパと東ヨーロッパに2つの機会を見つけた。



NSDAP/AOは世界最大です 国家社会主義プロパガンダサプライヤー！

多くの言語での印刷物およびオンライン定期刊行物

多くの言語の何百冊もの本

多くの言語の何百ものウェブサイト



BOOKS - Translated from the Third Reich Originals!
www.third-reich-books.com

